

## 対人関係と模倣の発達

内藤 哲雄

### On the development of interpersonal relation and imitation

The purpose of this study is to reconstruct the theory of assimilative behavior. At first, for studying imitation, we discussed the importance of developmental approach. Secondly, we investigated imitation from the standpoint of interpersonal relation, comparing the theory of Piaget with that of Bowlby. In consequence, we adopted the concept of social consciousness of interpersonal adjustment. The result was that bodily attachment and unintentional imitation may be attributed to the same and identical process (we call it assimilative behavior) in a very early infancy. At the later stage, the former develops into psychological attachment, while the latter into intentional imitation. And we pointed out that assimilative behavior occurs even in the adulthood, where unconscious mechanism is dominant.

**Key words:** assimilative behavior, bodily attachment, unintentional imitation, social consciousness.

### はじめに

模倣は、人間行動の中ではごくありふれたものである。生後72時間以内の新生児でさえも大人の顔の表情を模倣することができることが知られている<sup>1)</sup>。幼児は母親の言葉をためらいがちに復唱するし、学童児はテレビのコマーシャルのしぐさやキャッチフレーズをオーム返しする。青年たちもテレビタレントの衣装や話し方をまねている。このように発達のどの段階であるかを問わず、我々のさまざまな行動は模倣を通じて獲得され変容されている。それゆえ模倣は、パーソナリティの形成や社会化の重要な説明概念となっているのである。

ところで、模倣行動はいうまでもなくモデルの行動を模倣することである。ということは、モデルとなる他者との対人関係の様式が、なんらかの影響を及ぼすことが考えられる。他方模倣者自身の知的能力もまた、模倣の内容を左右するといえよう。こうした論議は、必然的に対人関係と模倣の発達の变化に目を向けさせることになる。そこで本研究では、模倣行動の解明に際し、模倣と対人関係形成の機制がどのような関係にあるかを検討するとともに、それらが発達によってどのように変容するかを明らかにしようとするものである。さらに、対人関係の形成に障害を示す自閉性障害児の発達の特徴をとりあげ、筆者の提唱してきた同化行動の理論を再構築することが本研究の目的である。

信州大学医療技術短期大学部一般教育等；Tetsuo Naito, Liberal Arts, Sch. Allied Med. Sci., Shinshu Univ.

## 1. 発達のアプローチの必要性

アメリカのみならず現代の模倣研究に対して最も大きな影響を及ぼしたのは、Bandura の提唱した社会的学習理論であろう<sup>2)3)4)</sup>。彼は、従来の学習心理学が、単独事態での試行錯誤による学習という側面に力点を置いてきたことを批判する。人間行動においては、注意・思考などの認知機能が大きな役割を果たし、他者の行動のモデリングによって多種多様な行動の習得が可能となる。また、社会的行動や危険をともなう行動の習熟には、他者の行動を意識的・意図的に模倣することが不可欠であることを指摘した。Bandura はさらに、模倣者側の要因にとどまらず、モデルとの対人関係など、社会心理学の多くの知見を積極的に体系に取り込んでいる。社会的学習理論のこのような点は、従来の学習理論による模倣の解釈が（たとえば、Miller & Dollard, 1941）<sup>5)</sup>、条件づけの原理の単純な拡張にとどまっておき、本能論の単純な一般化と50歩100歩ともいえるのに対し、飛躍的に優れた説明理論であるといえよう。それだからこそこの理論は、模倣の異なった多くの側面に関し感銘を与えるほどたくさんの研究を刺激したのである。

しかしながら、Bandura および彼の理論の追従者たちは、一貫して非発達のアプローチをとっている。発達論者が、心理的構造の変化とそれに基づく行動の変化に焦点を当てるのに対し、Bandura を含む学習理論家は、年齢による違いは媒介過程や媒介要因の差異とみなす傾向がある。そして学習理論家は、全ての年齢に適用できる説明原理が存在すると仮定するために、特定の発達段階の被験者だけを典型として採用する。このようにして得られた知見は、人間の模倣一般を記述するものとして解釈されることになる。

それでは発達論の立場では、模倣の発達による変化をどのように考えるのであろうか。多様な動物の模倣行動の差異を検討し、人間の模倣の発達の变化について考察した Yando らの研究をみてみよう<sup>6)</sup>。それらの内容は、以下のようになる。まず多種類の動物の模倣内容の比較から、遅延模倣の能力が知的能力の指標となることが示唆された。低次元動物でも強化によって即時的模倣の表出が可能であり、多くの動物で信号を与えられたときに以前遂行した模倣行為を繰り返すよう訓練されることも可能である。しかし観察した後いくぶんか長い時間が経過した後で反応する遅延模倣が可能となるためには、記憶を保持するための内的表象を形成し行動に導く能力を必要とする。受身的観察に続くそうした遅延模倣、すなわち観察学習は、より高次元な頭脳を持つ生活体に見出されることになるのである。動物における観察学習の例は、モンキーやチンパンジーのような霊長類だけでなく、イルカやネコにも見られる。

ここで人間の模倣の発達に目を移してみると、個体発生の側面が模倣技能の発達の系統発生の側面を要約しているようである。生後3カ月以内の人間の乳児は、遅延模倣に必要な脳の成熟が満たされておらず、大人のチンパンジーよりも模倣能力が劣っている。人間の模倣の最初の有意な変化は、単純かつ即時的な模倣形態のみ遂行可能な状態から、遅延模倣の能力を持つ状態へと変化することである。

さらに Yando らは多くの文献を検討した結果から、生活体が示す模倣の複雑さのレベルと知的能力が常に規則的に対応することを指摘する。そして知的能力の増加は模倣される行動の

量と正確さの増加を導くだけでなく、模倣をコントロールする機制自体の差異をも招来すると推論している。まず、ネズミや下等な霊長類及び人間の幼児のレベルでは、外的事象を表象化したりコード化するために身体活動を用いることをあげている。この運動記憶の源初的形態は、成人にとっても有効なものとして持続する。大人が目を閉じてカップのコーヒーを飲むことができるのは、手の中の重さの手がかりと口の感覚受容器からのフィードバックにより必要な情報を入手するからである。より知的な例は、ピアニストやタイピストの複雑で非常に速い指の連続作業である。次の段階に至ると、視覚的な心像によるコーディングが可能になる。

人間が獲得する最終的な表象的コーディングは、言語形式によるシンボリックなコーディングである。言語の獲得は認知における非常に多くの主要な変化をもたらす、模倣の特性は再び急激に変化する。シンボリック以前の模倣様式を研究するための最も重要な年齢段階は、これまでその重要性に値するだけの注意が払われてこなかったが、1歳から5歳までの期間である。言語的思考と非言語的思考の関係は曖昧であるけれども、これらの期間は言語的思考能力が増加することによって特色づけられる。それにもかかわらず、すでに言語能力を獲得した4-5歳の子供がそれを使用しないことが多いが、これは他のより選好される様式と競合するためと考えられる。5歳から7歳の間のどの時点かに至って、ようやく言語的システムが他の表象様式よりも確実に選好されて使用されるようになると思われる。またLuriaの研究から、初期のステージでは運動的システムと言語的システムが独立しており、後期のステージでは両者が葛藤し、最終的に言語が運動的行動を実質的にコントロールするようになると思われ推論される。

以上のようなYandoらの考察に鑑みるならば、発達的变化を単純に媒介過程や媒介要因の差異と見なすことはできないであろう。換言するならば、模倣の機制を解明するためには、発達的アプローチが必要であるといえよう。

## 2. 模倣と対人関係

日常生活にみられる何気ないしぐさから世界観のような信念に至るまで、広範な人間行動が他者の行動を模倣することにより獲得され変容されることが知られている。従って、モデルとなる人と模倣者の対人関係が模倣行動に重大な役割を果たしているのは自明であり、いまさら取り上げる必要もないように思われる。しかしながら、模倣と対人関係の両者の関係を取り上げ、それらが発達にともないどのように変化するかを検討したものはほとんど見あたらない。たとえばFreudの同一視の概念では、モデルとの同一視（無意識的な一体化）とこれによるモデルの特性の摂取が取り上げられてはいるが、その後の発達により模倣の側面と対人関係の側面がそれぞれどのように変化し、両者の関係がどのように変容するかについては考察されていないのである。

そこで本稿では、模倣の発達理論家として最も著名なPiagetの研究を、モデルとの対人関係の観点から再吟味することからはじめたい。

### (1) Piagetの模倣研究における対人関係の位置づけ

模倣の発達について最も独創的かつ体系的な研究を推進したPiagetは、模倣行動と対人関

	対物関係		対人関係	
	認知	情意	認知	情意
感覚運動期	A			D
表象(操作)期		C	B	

図1 ピアジェの看過した研究領域  
(空白部分：Cの右半分、Dの全体)  
浜田(1983)より

係との対応をどのように考えたのであろうか<sup>9)</sup>。浜田(1983)は、Piagetの認知と情意の発達に関する研究を整理することによって、対物行動と対人行動の根本的な差異が看過されていることを指摘している(図1参照)<sup>8)</sup>。

すなわち、Piagetの認知と情意の研究では、対物—対人の軸と合わせて2元軸が導入されているにもかかわらず、実際には図中の斜線の部分のみを対象としており、認知と情意が相補するのはAとBのみであるというのである。換言すれば、感覚運動期においては、個人内感情(対物関係における情意)しか念頭に置かず、表象形成後の発達段階においては対物の情意を無視し、逆に個人

人間感情(対人関係における情意)のみを取り上げているというのである。そこで浜田は、Piagetは情意発達の流れをA→Bという形で展開し、感覚運動期については全体性をとらえそこなっていると結論する。

上述の浜田の見解が全面的に妥当するか否かはさておき、Piagetの場合、発達初期は自他が未分化な状態にあるとして、特に対人関係を理論体系の中で取り上げる必要性を感じなかったのではないと思われる。それでは、感覚運動期の対人関係については格別に言及すべき意義はないのであろうか。この点を論考するために、ひとまず事項ではモデルとの対人関係が模倣において果たす役割について検討しよう。

## (2) 模倣における対人関係の役割

比較行動学の研究によって刻印づけ(imprinting)とよばれる現象が発見されたことを契機として、群居性の動物には対他関係を形成するための生得的な機制が存在することが明らかにされてきた。

人間の研究でも、誕生間もない新生児の段階から最も注意を引く対象は、物ではなく人間そのものであることが実験により確認されている<sup>9)</sup>。こうした実験例は、人間においても生得的に他者との相互作用を形成し維持しようとする傾性の存在することを支持するものである。誕生直後には主として感覚器官(目・耳・口)を通じての他者への定位(視線による追跡など)や発信(泣き叫び、微笑など)として発現していたのが、身体機能の発達にともない接近行動を表出するようになる。これら一連の行動は、愛着行動(attachment behavior)と総称され、この機制により対人関係が成立し展開していくのである<sup>10)</sup>。さらに初期の対人関係の様相は、その後の対人関係のみならず知能やパーソナリティの発達にまで影響を及ぼすことが知られている<sup>11)</sup>。

以上の知見に鑑みるならば、発達段階のいずれであろうとも、愛着行動の側面が模倣行動の側面と密接な関係にあることは明白となろう。なぜならば、模倣者がモデルである人間に注意を向けることが模倣の前提条件であり、これによって成立する模倣により模倣の内容や機制の

様式を決定する知能やパーソナリティの発達も促進されると考えられるからである<sup>脚注1)</sup>。このような背景から、Freud (1921) はモデルとの同一視 (identification) を<sup>12)</sup>、Bandura (1977) はモデルの魅力 (attractiveness) を<sup>4)</sup>、さらに Piaget はモデルへの尊敬 (respect) の要因を<sup>7)</sup> 取り上げるのである。

しかしながら彼らのように、モデルとの対人関係が重要であることを示唆するにとどまったり、発達段階の一部でのみ取り上げたり、全ての関係を一律に扱うというのでは、せっかく取り上げたとしても着眼点を生かしきれないといえよう。このような論議の展開の基に Piaget の研究を振り返るならば、彼が模倣の発達の研究において体系的には取り上げなかった感覚運動期の対人関係に、むしろ積極的に着目しこれを包含した理論の構築を図るのが有用であるとの結論に至るであろう。そこで次項では、感覚運動期を中心として模倣と愛着の両者の関係を検討するために、両分野を代表する Piaget と Bowlby の研究を整理することで考案を進めた。

### (3) 模倣と愛着の対応関係: 感覚運動期を中心として

Piaget による模倣の発達段階と、Bowlby による愛着の発達段階を、それぞれ該当する年齢に対応させながら左右にまとめたのが表 1 である。これを参照しながら Piaget が感覚運動期とよんだ範囲を見るならば、この期間は概ね 2 歳までであり、模倣行動は循環反応から象徴的なものへと変容していくけれども、いずれも無意識で単に外的運動と自我の混合であるとされている。他方の愛着行動の方も、不特定な他者から特定の他者へと発現の相手が収斂し愛着が形成されてくるが、感覚運動期に対応する 2 歳までは、無意図的で目標修正的な行動はみられないとされる。つまり Piaget や Bowlby によれば、1-3 カ月頃までは両側面とも準備的あるいは原初的と呼ぶべき形で発現し、それ以後は模倣や愛着がみられるようになるけれども、発達により次第に変容していく。しかし感覚運動期が終わる 2 歳頃までは、いずれの側面も無意識的・無意図的であるというものである。

ところで、ここで注目すべきは愛着の側面であり、他者への定位と発信が次第に接近行動と発信へと変わり、対象となる人物が不特定であったのが特定化してくることである。そして特定化された他者との相互交渉を通じて Piaget が操作期において取り上げる言語的知能が獲得されるようになるという点である。すなわち、愛着の対象である母性の人物による刺激の提示が乳児の模倣内容の大部分であり、これが知能の発達を促し、模倣と愛着は次の段階へと移行するといえよう。それでは、このように緊密な関連を持つ模倣と愛着の両者とこれらの関係を包摂する機制をどのように概念化すればよいであろうか。

ここで参考となるのは、Freud の同一視の理論である。彼は、発達の初期に無意識の機制としての同一視が生じることを主張している。無意識のうちに対象と自己を同一視し、この同一化したモデルから全体的かつ力動的に模倣するというのである。そしてこれによってパーソナ

注 1) 高橋 (1974) は、乳児の愛着行動 (たとえば微笑) が母親の行動を誘発するという点に言及している<sup>13)</sup>。模倣においても、乳児の行動が連鎖的にモデルの側が提示する模倣刺激を誘発することが考えられる。この点も模倣研究における重要なテーマであり看過できないが、ここでは取り上げない。

表1 模倣と愛着の発達の変容

知能	模倣の発達(Piaget,1945より作成)		およその年齢	愛着の発達(Bowlby,1969より作成)	
	発達段階	様態		発達段階	様態
感覚運動的知能	第1段階	・反射による準備の段階 (外的刺激による反射)	1ヶ月	第1段階	愛着無 ・人物弁別をとまわらない定位と発信
	第2段階	・散発的模倣の段階 (経験により獲得され分化された循環反応として拡大)	3ヶ月		
	第3段階	・発生可能、自身で観察し遂行した運動の組織的模倣	6～7ヶ月	第2段階	不定(注2) ・ひとり(または数人)の弁別された人物に対する定位と発信
	第4段階	・遂行済みだが見えない運動の模倣と新しい聴覚的・視覚的示範の模倣	8ヶ月	第3段階	愛着 ・発信ならびに動作の手段による弁別された人物への接近
	第5段階	・経験もなく見たこともない新しい示範の組織的模倣	2歳		
	第6段階	・表象的模倣、後発模倣の開始と発達			
言語的知能	さらに進化した段階 (象徴的思考) (直感的思考)	・表象的模倣の活発化と自発的な一般化 (自己中心的でしばしば無意識)	7歳	第4段階	・目標修正的協調性の形成 (母性の人物の感情および動機の洞察可能)
		・表象的模倣の入念化、知能自体への統合・再統合			

(注1) 感覚運動期の模倣は、無意識で単なる外的運動と自我の運動の混合である。しかし、成人となっても後期に発現する機軸の仲介者として基本的役割を演じ続ける。

(注2) 愛着の存在と程度は、研究者の定義による。

リティの中核が形成されると述べている。これは内藤（1977, 1979, 1981, 1984, 1985）の提唱する同化行動の理論の根幹にかかわる考え方である<sup>14)15)16)17)18)</sup>。そこでいよいよ次節では、同化行動との関連において論考しよう。

### 3. 同化行動の理論と発達の展開

本節では、愛着と模倣の両側面が同一機制とみなせるのは発達段階のどの範囲か、この機制はどのようなものであるかを検討し、それに基づいて同化行動の概念化を試みる。

#### (1) 同一機制としての愛着と模倣

さきに Freud の同一視の理論を根拠に、発達初期の愛着と模倣は同一機制の 2 側面として解釈できることが示唆された。こうした見解は、他の研究者によっても採用されている。今西（1960, 1976）は、ニホンザル社会の伝統の伝達において同一視の役割を取り上げ、これが刻印づけと表裏の関係にあると理解する<sup>19)20)</sup>。彼によれば、対象を主体化するのが同一視であり、それが同時に主体の対象化としての刻印づけになる。そこで前者がうまくいくほど後者もうまくいって、対象がそっくり主体へ入り込んでしまうというのである。さらに彼は、対象が主体へ入り込むことすなわち刻印づけに、対象と主体の愛着の形成とパーソナリティの摂取の両方を含めている。岩下（1975）もまた、刻印づけにおける追従行動を取り上げ、これを同一機制の 2 側面のいずれの指標としてもみなすことができるとしている<sup>21)</sup>。他者とともにあろうとする行動は、相手が移動するとき追従行動の形をとることから、模倣行動ともみなせるというのである。

このように同一機制の表裏とみなせる愛着と模倣の関係は、発達にともない変容し展開していくことになる。Murray（1964）は、生得的な愛着が水路づけの機制で拡張されることにより、模倣が展開していくと主張している<sup>22)</sup>。従って、父親は幼い息子の社会的行動を形作ることができ、学童は遊び友達の価値により、大学生はフラタニティの仲間の期待により影響を受けるようになるというのである。

以上の諸研究から、発達初期では愛着と模倣を同一機制の 2 側面として考えることが支持されるとともに、この機制の発達の變容について考察すべきであることが明らかにされたといえよう。

#### (2) 社会的意識性と愛着・模倣の分離

これまでの論考により、発達初期では愛着と模倣が無意識的な同一機制の表裏として位置づけられることが明かとなった。ところで、ここで無意識的とか意識的とよぶものは、どのようなものであろうか。無意識や意識の概念は多くの研究者に自明なものとして採用されているけれども、曖昧なままに漠然と使用されることが多い。しかしながら、それらの概念を用いて愛着や模倣の機制の発達の變化を論じるというのであれば、定義づけを避けて通ることはできない。

ここで再び表 1 の Piaget と Bowlby の研究をふり返ってみよう。既述のように、感覚運動

期に対応する2歳までは、模倣も愛着もともに無意識的ないしは無意図的行動であるとされている。しかしながら表に示されているように、8カ月付近からは目に見えない運動の模倣も生じるようになるし、愛着の方も6-7カ月から発信や動作の手段として弁別された人物へ接近することが可能である。とするならば、彼らはどのような基準によって無意識とみなしたのであろうか。ここで表1の記述に目を向けるならば、その根拠と考えられる手がかりを得ることができる。Piagetが前操作期と呼んだ2歳以降の部分に、「表象的模倣の活発化と自発的な一般化（自己中心のしぼしば無意識）」とあること、またBowlbyの第4段階で同じく2歳以降の部分に、「目標修正的協調性の形成（母性の人物の感情および動機の洞察可能）」とまとめられている点に着目することができよう。少なくともPiagetやBowlbyは、意識的・意図的な模倣ないし愛着とは、模倣や愛着の具体的内容の当該状況における客観的な意味づけ、また対象となる人物（モデル）との対人関係や相手の意志や感情といったものを配慮した行動とみなしたように思われるのである。そこで、このような「社会的意識性」と呼ぶべきものが芽生えてない段階が、感覚運動期にあたるということができよう。

そして操作期に至ると、無意図的模倣の側面は、表象・言語の獲得と発達にともない意図的な模倣へと変化するようになる。他方の愛着は、Bowlbyが目標修正的協調性と呼ぶものへと変化し、相手の感情や動機の洞察が可能となる。このような発達段階に至るならば、相手の期待に沿う形での模倣行動が出現するようになるといえよう。換言すれば、模倣が愛着の手段となり得るのである。一方が他方の手段となり目標となるということは、両側面が分離・独立することを意味する。つまり、Piagetが操作期と呼んだ2歳以降は、それまで同一機制の2側面であったのが、無意図的模倣は意図的模倣へと、無意図的愛着は意図的愛着へとそれぞれ分離し、独立の機能を獲得することになるといえよう。

### (3) 自閉性障害児の対人関係と模倣

自閉症と略称される早期幼児自閉症 (early infantile autism) の疾病概念は、Kanner (1943)<sup>23)</sup>の提唱以後著しい変遷を遂げてきたが、現在では胎生期や周生期に何らかの侵襲が加わったことによる後遺症として生じた全般的な発達障害とする考え方が主流である<sup>24)</sup>。しかしながら、Kannerの指摘した症状に関しては現在でも支持されている。主症状は、(1)人間関係樹立の困難、(2)同一性保持の欲求が異常に強いこととされている。また主症状に付随して、(3)コミュニケーションの目的に言語を用いようとしないうこと、言語の発達する場合でもしばしば反響言語、人称代名詞反転といった奇妙な形をとりがちなこと、(4)事物への偏った関心、(5)埋もれた知的閃き、概念のひ弱さ、などの特徴があげられている。

さて、上述の症状の中で特に注目されるのは主症状(1)での対人的な感情の交流の欠如であり、自閉性障害児 (autistic children) は、幼児期の初期から他者の視線を回避したり、他者との関わりを拒否するという特徴を示すことである。というのは、幼児期初期からの人間関係樹立の困難さは、愛着形成の困難さを意味するからである。このため前項で提起した「社会的意識性」が獲得されず、無意図的模倣の側面も意図的模倣へと発達・変容しないと考えられるからである。この推論を支持するのが、3歳以降も頻繁に出現する症状(3)の反響言語や人称



代名詞の反転である。反響言語とは、たとえば「いま何時」ときくとそのままの語調で「イマナンジ」と答える現象で、オーム返し言葉ともいわれる。人称代名詞の反転とは、親が「お水あげましょう」といって水を与えた場合、症児が水を飲みたいときに「お水ちょうだい」という代わりに「お水あげましょう」といって請求するといった類である。これらはいずれも無意図的模倣である。隠岐(1982)は、自閉性障害児が生来的に人生初期での母子関係を危うくするような、すなわち自らを一種の仮性社会刺激遮断に陥し込まざるを得ないような機構をもっている」と推論している。そして、このために症児らはひとりぼっちのひとりよがりにならざるを得ず、これが認知の方向づけの偏奇、経験の貧困、経験学習の不全など悪循環的に作用し、ますます特異な行動をあらわすようになると結論している<sup>25)</sup>。

以上のような特徴をもつ自閉性障害児においても、他者との交流が可能になり対人関係が改善されると、反響言語や人称代名詞の反転が次第に消失し、社会性が著しく改善していくことが知られている。すなわち、「社会的意識性」が発生し、意図的な対人関係をもてるようになるのと平行して意図的模倣が出現するようになるのである。

#### (4) 同化行動の定義

これまでに、発達初期の愛着と模倣は、無意識的・無意図的で同一機制の2側面であると考えられ、社会的意識性の出現とともにそれぞれが意図的愛着と意図的模倣に分離・独立することについて述べてきた。さらに、そのことを自閉性障害児の症状の考察によって援用してきた。

ここで再び健全児を対象として発達段階を遡り、模倣と愛着を同一機制の表裏とみなし得るのはどの位の月齢からかを検討してみよう。Piagetがあげた第2段階の散発的模倣の事例としては、Tの1カ月4日での泣き声の伝染(contagion)がある。そこで表1によりこの日数に対応する愛着の様態をみると、人物弁別をとともなわない定位と発信の段階となっている。一般に、愛着行動とは、特定人物への定位や発信として定義される。そこでこの段階を機制に含めるかどうかの問題となる。

ここで先に述べた刻印づけについての知見を想起するならば、まず不特定な対象への定位や発信の機制がありそれが特定の対象へと収斂していくことがあげられる。そうすると、本来的な定義からは“愛着と呼ぶのはおかしい(Bowlby)”とされるけれども、特定化されない他者への定位や発信も、なんらかの過渡的な愛着というか、愛着に準じるものとみなすことも可能なように思われる。しかも、人間の場合には発達がきわめて緩慢であるがゆえに、特定の人物へ集中化した定位と発信が出現するのに時間を要すると考えることもできるのではあるまいか。Hinde(1961)が、人間の子供では、最初は微笑反応が後には追従反応が、徐々に一定の人々に限定されるようになると仮説的に考察している<sup>26)</sup>ことも、これを裏付けるように思われる。

以上の見解をもとに、生後2カ月目頃からほぼ2歳頃までに生起するものとして、愛着的側面と模倣的側面を合わせた機制を想定することができよう。しかし既述のように、準愛着的なものは本来的な定義からは愛着と呼ばないのであるから、われわれはこれを含めた新しい概念を“接着”と呼ぶことにしたい。そして2カ月目以降の感覚運動期の接着は、初期は追視・微笑など感覚器官を通じて、後に身体機能が発達すると直接的な追従行動として、いずれも身体

的な接近を目指す行動が発現するのであるから、“身体的接着 (bodily attachment)” と称したい。また操作期以降の接着は、既述の社会的意識性の機能する行動であることから、“心理的接着 (psychological attachment)” と呼びたい。

このようにしてわれわれは、同化行動 (assimilative behavior) の定義に至ることになる<sup>脚注2)</sup>。すなわち同化行動は、ほぼ感覚運動期

に該当する生後2ヵ月目頃から2歳の間に生起する機制であり、モデルの動機・感情や状況把握などについての配慮のない、換言するならば社会的意識性を欠くという意味での、無意識的・無意図的な行動である。そしてこの機制においては、身体的接着と無意図的模倣 (unintentional imitation) は表裏の関係にある。さらに、発達のより早い段階ではモデルは不特定であるが、次第に特定化されていくことになる。他方模倣内容は、経験により獲得されている行動の循環反応的なものから、先行経験のない表象的なレベルの模倣へと進むのである。このような同化行動は、2歳以降になると言語・表象や社会性の発達にともない、身体的接着は心理的接着へ、無意図的模倣は意図的模倣 (intentional imitation) へとそれぞれ変容し、独立の機能を獲得していくことになる (図2参照)。

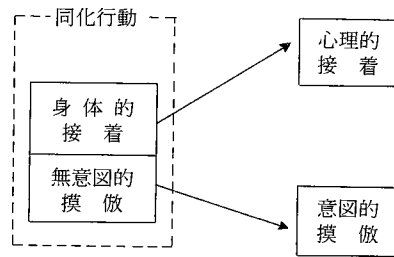


図2 同化行動と発達の変容

##### (5) 成人における同化行動

感覚運動期に生起する同化行動は、他者からの直接的・間接的な強化をとまなう経験を積み重ねるにつれて、他者の感情や意図を配慮しながら行動する目的的な対人行動、すなわち社会的意識をもった適応行動へと変化し、両側面は分離・独立していく。そしてこの適応行動の機制は、言語能力の増進と洗練により一層発展していくのである。それでは同化行動の機制は、操作期以降の発達段階においては消失してしまうのであろうか。

多田 (1972) は、成人においても、他者との物理的な近接が「なじみ」という対人的結合を生じ、これを重ねることによって双方が似てくること、この現象が無意識的であることを報告している<sup>27)</sup>。無意識的であれば当然のことながら社会的意識は存在せず、目的的な適応機制は機能しないのであるから、ここでなじみを身体的接着と解釈するならば<sup>脚注3)</sup>、この現象は同化行動の生起を意味することになる。このように発達初期にみられる無意図的模倣が成人でも発現するという着想は、さほど斬新なものではなく、Freudの同一視の理論の他にもかなり以前からみられるものである。Moede (1920) は、発達初期に豊富に発現する反射的・機械的模倣

注2) 本稿の同化行動は、リビドー論など精神分析を背景とするFreudの同一視とはかなり異なる概念を包含している。また今西が同一視の裏面に刻印づけを考えたように、概念を拡張する場合には、異同を明確にすることなしには理論的展開ができない。従って、他の研究に拘束されことなく概念化を進める便宜上、新しい用語として“同化行動”を採用した。

注3) “なじんでいる”が be attached to と英訳できることから、なじみを身体的接着とみなすことが支持されよう。

が、注意のまったく存在しない部分では成人においても生じること、これは“集団の本能”に基づくとの見解を示し、実験的検討を試みている<sup>28)</sup>。

上述のような諸研究をもとに、同化行動と適応行動の関係を図示するならば、図3のようになる。発達の進展につれ後者が前者を包み込みながらも、社会的意識の欠如した事態、すなわち無意識の機制が支配的な事態では再び前者の同化行動が露呈すると解釈できよう。近年飛躍的に研究が進んだ非言語的なコミュニケーションや、パニックなどの群集行動に典型的にみられるように、成人においても無意図的な対人機制の果たす役割は大きく、同化行動の解明による寄与は大きいといえよう。

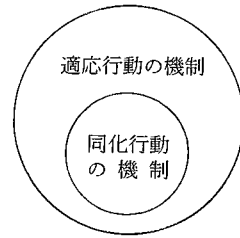


図3 同化行動の機制と  
適応行動の機制（内藤，1981）

## 要 約

本研究では、まず動物の模倣に関する知見をとりあげ発達のアプローチが必要であることを示した。ついで、模倣行動とモデルとの対人関係が密接に関連しているにもかかわらず、模倣の発達について最も独創的かつ体系的な研究を推進した Piaget も発達初期の感覚運動期については考察していないことが明らかにされた。そこで感覚運動期を中心として模倣行動と対人関係の様式を比較検討し理論の構築を図るために、Piaget の模倣の発達理論と Bowlby の愛着理論を発達の時間的経過に沿って表にまとめた（表1参照）。その結果、感覚運動期における模倣と愛着は、ともに無意識的・無意図的なもの、すなわちそれぞれの具体的内容の当該状況における客観的な意味づけ、モデルの動機や感情とかモデルとの関係を配慮する「社会的意識性」が欠如したものであることが明らかとなった。さらに、いくつかの理論的考察から、発達初期の模倣と愛着的側面は、同一機制の2側面とみなすことができた。こうした見解は、自閉性障害児の症状の考察によっても支持された。

上述のような背景に基づいて、同化行動の理論的枠組みが提案された。これは、ほぼ感覚運動期に該当する生後2カ月頃から2歳の間を生起する無意図的な機制であり、身体的接着と無意図的模倣の2側面が表裏の関係をなしている。2歳以降になると、言語・表象や社会性の発達にともない、身体的接着は心理的接着へ、無意図的模倣は意図的模倣へと、それぞれ変容し独立の機能を獲得していく（図2参照）。しかし、成人となっても消失してしまうわけではなく、無意識の機制が支配的な事態では生起すると考えられた。また成人における同化行動の発現は、非言語的コミュニケーションやパニックなどの群集行動の解明に寄与することが示唆された。

## 文 献

- 1) Meltzoff, A.N. & Moore, M.K. : Newborn infants imitate adult facial gestures. *Child Development*, 54, 702-709, 1983.
- 2) バンデュラ 原野広太郎・福島脩美（訳）：人間行動の形成と自己制御：新しい社会的学習理論。金子書房，1974。（Bandura, A. : *Social learning theory*, 1971.）

- 3) バンデューラ (編) 原野広太郎・福島脩美 (訳): モデリングの心理学: 観察学習の理論と方法. 金子書房, 1975. (Bandura, A. (ed.): Psychological modeling: Conflicting theories, 1971.)
- 4) バンデューラ 原野広太郎 (監訳): 社会的学習理論: 人間理解と教育の基礎. 金子書房, 1979. (Bandura, A.: Social learning theory, 1977.)
- 5) Miller, N. E. & Dollard, J.: Social learning and imitation. Yale Univ. Press, 1941.
- 6) Yando, R., Seitz, V., & Zigler, E.: Imitation: A developmental perspective. JohnWiley & Sons, 1978.
- 7) ピアジェ 大伴 茂 (訳): 模倣の心理学 黎明書房, 1968. (Piaget, J.: La formation du symbole chez L'enfant, 1945.)
- 8) 浜田寿美男: 認知と情意の発達. 波多野完治 (監修) 高橋恵子 (編): ピアジェ理論と自我心理学, ピアジェ双書6, 第1章, 9-46, 国土社, 1983.
- 9) Fantz, R.L.: The origin of form perception. Scientific American, 204, 5, 66-72, 1961.
- 10) ボウルビィ 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳): 母子関係の理論(I): 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1976. (Bowlby, J.: Attachment and loss. Vol.1, Attachment, 1969.)
- 11) 浅見千鶴子: 社会的反応の成立. 岡本夏樹・古沢頼雄・高野清純・波多野誼余夫・藤永 保 (編): 児童心理学講座第7巻, 社会的発達, 第2章, 27-56, 金子書房, 1969.
- 12) フロイト 井村恒郎 (訳): 自我論. 83-188, 日本教文社, 1970. (Freud, S. Massenpsychologie und Ich-Analyse, 1921.)
- 13) 高橋道子: 乳児の微笑反応についての縦断的研究: 出生直後の自発的微笑との関連において. 心理学研究, 45, 256-267, 1974.
- 14) 内藤哲雄: 対人機制としての同化行動に関する実験的研究(I): 同化行動生起におよぼす一条件としての恐怖の効果. 心理学研究, 48, 156-162, 1977.
- 15) 内藤哲雄: 対人機制としての同化行動に関する実験的研究(II): 同化行動生起におよぼす注意他在の効果. 心理学研究, 50, 279-282, 1979.
- 16) 内藤哲雄: 模倣行動に関する一考察: 同化行動の提唱とその展望. 早稲田心理学年報, 13, 56-65, 1981.
- 17) 内藤哲雄: 同化行動の理論的考察: 模倣と接着の発達の展開. 対人行動学研究, 3, 13-19, 1984.
- 18) 内藤哲雄: モデルへの注意狭窄が同化行動の生起に及ぼす効果. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 11, 1, 1-6, 1985.
- 19) 今西錦司: トリ・サル・人間 人文学報, 10, 1-24, 1960.
- 20) 今西錦司: 私の霊長類学. 227-263, 講談社, 1976.
- 21) 岩下豊彦: 共感の社会心理. 春木 豊・岩下豊彦 (編著): 共感の心理学, 121-170, 川島書店, 1975.
- 22) マレー 八木 晃 (訳): 動機と情緒. 現代心理学入門3, 岩波書店, 1966. (Murray, E.J.: Motivation and emotion, 1964.)
- 23) Kanner, L.: Autistic disturbance of affective contact. Nervous Child, 2, 217-250, 1943.
- 24) 石川知子・中根 晃: 自閉症. 大原健士郎 (編): うちの子に限って: 異常性発見234のチェックポイント, 30-48, 至文堂, 1983.
- 25) 隠岐忠彦: 自閉症の人間発達学. 誠信書房, 1982.
- 26) Hinde, R.A.: The establishment of the parent-offspring relation in birds, with some mammalian analogies. In W.H. Thorpe & O.L. Zangwill (eds.): Current problems in animal behavior. Cambridge Univ. Press, 1961.

- 27) 多田道太郎：しぐさの日本文化。筑摩書房，1972.
- 28) ムーデ 瀬川良夫（訳）：集団の心理 東洋書館，1944. (Moede,W.: Experimentelle Massenpsychologie, 1920.)

受付日：1989年10月30日